

平成19(2007)年度 卒業研究要旨

11030027 笠原 明奈

「HP作成」

ホームページを作る人が増えている。パソコン初心者でも簡単にできるブログサイトも大変賑わっている。本稿では、HP作成ソフトがなくても一から作れるよう、メモ帳を使いHPを作成する基礎工程を調査した。HP作成に限らず、基礎工程が理解できていればブログサイトを利用している人もオリジナルスキンを作ることができる。またHPを作成する上で必要、便利となるカラーチャート、ショートカットキーも表記した。

11030073 高岡 俊介

「日本の大衆文学の現在」

小説とは何か？ どのように変わって来たのか？ というテーマで大衆小説について調べてみた。大衆小説においては作者の体験に基づかない空想小説と呼ぶべきものが多いこと。また、直木賞の歴代受賞作を見ると、初期には歴史小説が多かったのに対し、現在ではファンタジー系やホラー系を含めジャンルが多岐に拡がりつつあることなどがわかった。そして活字離れの進行とともに携帯小説というジャンルが確立しつつあることなどについても考察した。

11030109 吉田 慶多

「ベルセルクのこれからについて」

今回はベルセルクという長編漫画作品を題材に取り上げていこうと思う。この作品は連載がスタートしてからすでに15年以上の時間が経過しており単行本は現在32巻が発刊されているが、未だに終わる気配を見せない。この作品は日本の漫画界においてダークファンタジーと言うジャンルをメジャーなものに押し上げた作品であり、その謎の多い伏線を研究し考察して今後の展開を予想しようと言う趣旨である。

11040001 浅川 武志

「カタカナ語の語尾の長音符号について」

「プリンター」を「プリンタ」と呼ぶ人がある。また、「コンピューター」を「コンピュータ」と呼ぶ人もある。このように現在、カタカナ語の語尾の長音符号は曖昧になっているのが実情である。

では、いったい、カタカナ語の語尾の長音符号はどの言葉に必要で、どの言葉にはいらぬのか、はたして基準はあるのだろうか。カタカナ語の語尾の長音符号についてのあらゆる疑問を解明して

いこうと思う。

11040002 浅利真衣実

「接客場面における言葉遣いの丁寧さと違和感」

接客場面の言葉遣いに関して、近年「こちら～になります」などの新丁寧語が問題とされている。本研究では、新丁寧語と規範とされる言葉遣いにはどのくらいの丁寧さと違和感があるのか、適した言い方なのかなどを、11の言葉遣いについて、アンケートをとり調査した。その結果、新丁寧語は規範とされる言葉遣いと比べて、丁寧さはあるものの、違和感を覚える人は多く、接客場面に適した言葉遣いではないということがわかった。

11040003 油谷 健一

「日本の助数詞についての考察」

今回課題とした助数詞とは「ものの数え方」のことである。人や物、その他様々な数え方が日本には存在する。私達が普段日常的に使用しているこの「助数詞」とは何なのか？ さらに助数詞にはものによっては複数の数え方が存在する。それらを私達日本人はどのようにとらえ、どのように認識し、使用しているのかを、過去の文献と現在の比較、アンケート調査、他の国との比較、自らの考察などから考えていきたいと思う。

11040004 新江 諭

「日本における外来からの料理用語の実態」

「ソテー」、「マリネ」といった言葉を知っているだろうか。それは料理をする際に出てくる言葉であり、料理には欠かせないものである。これらの言葉は外来から取り入れられた料理用語である。それはどのような意味を持ち、そこにある意味のズレ、またどのような状況で使用されているのか。そして導入時期や外来料理の時代背景との関連性、必要性等を私なりに研究から考察し論じたものである。

11040006 石田 明

「サラブレッドの馬名と、日本語の関係」

サラブレッドは、生産者達がより速く、より強く走る馬を生産するために、日々血統を研究し続けている。相性のいい配合、スピードをうまく遺伝させる配合、スタミナをうまく伝える配合、星の数ほどの成功と失敗を繰り返し、そしてその成功と失敗の数だけ、様々な馬名も生まれている。2007年度卒業論文として、その数ある血統表の中から、ある程度ピックアップして、サラブレッドの馬名から日本語との関連性を研究する。

11040007 市橋 勇真

「言葉の言い換え」

私たちは日々の生活の中でたくさん言葉を使っているが、その中には差別語というものが存在する。その語は時折様々な問題となり、その度に禁止語となってしまうか、違う形に言い換えられて使われてきた。そのような語はなぜ言い換えなければならないほど問題になったのか、またどのような形に言い換えられたのかといったことに注目することによって、差別問題というものを違った視点から考えてみたい。

11040008 市原 侑果

「連体修飾節の『外の関係』の『相対性』に関する考察」

連体修飾節の「相対性」は、連体修飾と主名詞の関係で細かく分類が行われてきた。そこで本稿では、赤川次郎の作品 20 冊から連体修飾節の用例を選出し、先行研究に沿って分類することで、先行研究のみでは分類が困難だと思われる用例の解釈、新たな分類枠の可能性を分析した。その結果、重要な主名詞に対する解釈の必要性和「内の関係」「同格節」に近い「相対性」の連体修飾節の存在が明らかになり、新たな分類枠を構築した。

11040009 伊藤 由佳

「環境問題とエコ」

今日、世界には様々な問題があり各国は頭を悩ませている。特に私達の生活と深く関わりを持つ環境問題。原因は先進国の豊かな生活を築き、維持することによるものが大きい。しかしその被害は、何も非のない発展途上国の人々が受けるという最悪な事態に陥っている。それを少しでも食い止めようとする動きがエコであり、その動きは今世界中で盛んになってきている。そこで、各国の環境問題と共に、エコ活動を調べてみる。

11040010 岩下 令子

「天明五年六月、名古屋城新馬場付近の御堀における心中男女の遺体発見事件について ― 江戸時代の「心中」を考える ―」

本論文は、徳川林政史研究所所蔵の「尾州御小納戸日記」を用いて、天明五年（1785）の六月に、名古屋城の新馬場付近の御堀において心中した若い男女の遺体発見事件について考察したものである。まず「尾州御小納戸日記」の解説をし、事件記事の全文を掲載、記事を現代語訳した。そして事件の概要を述べ、江戸時代の心中に関しても考察した。

11040011 岩■ 雄貴

「歌詞における特殊な読み方・表現方法について」

私たちが普段日常的に接している、歌。その歌詞の中に、様々な特殊な読み方を見つけた。個

性あふれるその用法の中にはどのような例があり、それらはどういった場面で多用されているのか。また、どういった目的で作詞者はその手法を使用したのか。たくさんの用例を調べ、それらをまとめた一覧表から読み取れることを、具体例をあげながら示し、一つ一つ検証していくとともに、その是非やこれからの在り方を位置づけてゆく。

11040015 大石明日香

「年少者の日本語教育と国語教育 リライト教材について」

現在、年少者の日本語教育はあらゆる面で問題視されている。その中でも進学については大きな問題である。今回は、高校受験を外国人児童生徒も受けられるようになるため、外国人児童生徒に対する国語教育を見てみたいと思う。外国人児童生徒の国語教育で大きな役割を果たしているのが、リライト教材である。まだ、あまり知られていないリライト教材を取り上げて、外国人児童生徒に対する日本語教育と国語教育を考えたいと思う。

11040016 大川 舞

「好感の持てる話し方」

好感の持たれる話し方は、良い人間関係を築き、人々の生活をより良いものにしてくれる。好感の持てる話し方をするためには、相手を不快にさせないように、相手を思いやった話し方をするのが大切だ。そのためには、いくつかのポイントがある。現代の若者は、特に敬語や慣用句などがきちんと理解できていない人がとても多いので、日本語をさらにじっくりと学び、自分自身の話し方について考え直す必要があるといえる。

11040017 大河原麻衣

「あいづちの男女差 ― 大学生の雑談における実態調査 ―」

日本語のあいづちは研究者によってさまざまな視点と手法で研究されてきた。そこで本研究では、あいづちの種類を7つの分類に分け、その使用率、使用頻度を男女別に調査することを目的とし、大学生の雑談をデータとして、男女で使用されるあいづちに差がみられるのかどうかを比較した。その結果、種類、使用率、使用頻度のいずれにおいても男より女の方が高い比率であいづちを使用しているということが明らかになった。

11040018 大久保幸子

「『源氏物語』から紫式部の人生観を考える」

『源氏物語』は光源氏の恋物語と考える人が多い。しかし作者の紫式部は、この物語に多くの女性を登場させて、自分の思想を語らせたのではないだろうか。平安時代の男社会に対し、紫式部は人生の不条理を感じていた。恵まれた立場の男達は、恋愛にも人生にも誠実さが欠けている。男の情愛にすがって苦悩した女達は、心の平穏を求めて出家した。そして女性は出家を決して後悔しな

い。紫式部は『源氏物語』の中に女性成仏を託した。

11040019 太田 麻美

「外国人から見た日本とその違い」

外国人から見て日本はどのように映っているのだろうか。日本のどんな所に興味を持ったり、不思議に思ったりするのだろうか。また、日本人とは、どのように感じ方や考え方が違ってくるのだろうか。研究したことは、日本の四季ごとに行われる行事について、どのくらいの知名度があるのか。また、日本についてどのくらい積極的に取り組んでいるのか、ということと、コミュニケーションの違いについてである。

11040020 大滝 知里

「中国人学習者の『て形』接続の誤用分析」

本稿では、KY コーパスを用いて中国人学習者の「て形」接続の誤用分析を試みた。初級では形式的誤用のみが見られ、超級では「て形」そのものの使用が少なかったため、レベル別に見ると中級中>中級下>中級上>上級上>超級>初級上という順番に誤用が多いという結果が得られた。また、誤用の内訳としては、「辞書形」→「と」、「と」→「て」、「たら」→「て」、の順に多いという結果が得られた。

11040021 大塚 夏季

「オーストラリアのクイーンズランド州における初等・中等課程の効果的な日本語学習」

現在オーストラリアの日本語学習者数は世界で第3位である。その9割以上が初等・中等課程の児童を対象に行っている。日本国内にある日本語学校はほとんどが成人学習者であるが、それと同じ教授法で果たしてうまく進めることができるだろうか。そこで本稿では、オーストラリアの日本語教育の現状、教育方針、Effective Teaching and Learningに基づき児童に対して効果的な授業を考察して教案を作成した。

11040022 大坪 舞

「茨城方言と共通語における言葉の性差と比較」

日本語には言葉の男女差が豊富に観察される。性差に関する研究は各機関で行われているが、そのほとんどが共通語に対する研究である。方言を使用する地方では言葉の性差がどの程度あるのか、また、近年言葉の性差がなくなりつつあると言われるが、そこにも地域差があるのか、という2点について研究した。本論文では、性差のもっともあらわれやすい終助詞に焦点をあてて研究し、考察を述べる。

11040023 大橋 愛代**「日本語と英語の差異」**

私たちにとって一番なじみのある外国語は英語である。そんな英語の文章と日本語の文章を比べたら、少し意味にずれが生じる。この意味のずれはなぜ起きるのか。そして、英語の「I」にあたる日本語は「私」なのか。「私」「僕」「あたし」「オレ」「あたい」「わし」…なぜこんなにも自分を指すことばが日本語には存在するのか。これらの疑問を、日本の漫画を例に出しながら追求した。

11040024 岡崎 えり**「IT用語の誤った呼び名とそのバリエーションが増える原因」**

パソコンやインターネットに関連するIT用語は複雑で読みづらい文字列である。本稿ではIT用語の難読さと不透明さを明らかにするため、20代を中心とした学生と社会人を対象に、IT用語の読み方に関するアンケートを行い、読み方の様々なバリエーションを調査した。その結果、ローマ字読み、頭字語として読む、知名度の高い別の語からの推測などが、バリエーションの要因として挙げられることが分かった。

11040026 小澤真美子**「非言語教育の必要性」**

人のしぐさや身振りは、時に言葉よりも相手の感情を知ることができる。言葉と共にその行動が相手に伝われば、よりコミュニケーションが図れるのではないかと思った。このことから私は第二言語習得の際、言語だけではなく非言語教育の必要性を感じた。この論文では、英語を母国語とする国とのノンバーバルコミュニケーションの違いを明らかにし、互いに問題となったケースを取り上げていく。また非言語教育をどのように行っていくかを私なりに論じる。

11040027 小野 文聡**「2ちゃんねる用語の意味、特徴をみる」**

現在、インターネット上に存在する2ちゃんねるは、ユーザーの数が日本一の巨大掲示板である。その2ちゃんねるには、我々が普段使わない様々な言葉、2ちゃんねる用語がある。数多くの2ちゃんねる用語の意味、それらの言葉の傾向を傾向を調べてゆくことにより、2ちゃんねるをよく知ろうと思う。また、最近2ちゃんねる用語に関して興味深いニュースがあったので、そちらも考察し、より2ちゃんねるを理解してみたいと思う。

11040029 柿沼 えみ**「オノマトペにおける日本人と外国人学習者の音感の相違」**

日本語では一般的な動詞と具体的なオノマトペが用いられるのに対し、英語では特有の動詞が用いられるため、オノマトペと一般語彙を区別することが難しいとされてきた。そこで本論文では、

日本語オノマトペの音韻形態と音韻的特徴を明らかにし、15歳～30歳位までの日本人40人とアメリカ人40人の男女を対象にアンケートを行った。その結果、共通の音象徴は個別的ではなく普遍的なものの可能性が高いことが明らかになった。

11040031 金井 愛

「携帯メールにおける若者のコミュニケーション ― 若者が生み出した新種の書きことば ―」

現代の若者にとって携帯電話は、重要なコミュニケーションツールの一つとなっている。携帯電話と言っても、若者たちが特によく利用するのはメール機能である。携帯をしようして送受信されるメールの文は、書きことばでありながら話しことば的要素をもっていると言われている。この新しい書きことばは、若者が携帯メールを利用する上で生まれてきたと考えられる。これについて、若者と携帯メールとの結びつきから考えた。

11040032 金子 武文

「日韓における外来語の使用実態 ― 両国の新聞を通して ―」

外来語の氾濫が問題とされているにもかかわらず、日本にはいたるところに外来語が多く見られる。そこで本稿では、近年の外来語使用実態に関して明らかにすべく、韓国の外来語使用を比較対照とし、両国の新聞を通して分析した。その結果、日本の外来語使用に関する実態は現在、韓国より比較的世間一般に定着しきれていない不安定な語が多く、理解しにくい語が使用されていることがわかった。

11040033 川合 泰嘉

「共通語と方言の共存方法」

本論文は方言と共通語の共存方法を述べたものである。方言が衰退していると言われている中で、方言の現在の使用状況や、その背景にある理由を調べた。また、方言が持っている価値を理解し、将来に残すべきなのかということ吟味した。そして継承していく価値があると判断し、そこから現在の方言と共通語がどのような関係にあれば、衰退しないのか、共存できるのかということ論じている。

11040037 熊野 洋平

「音・音楽・言葉と人との関わり」

何故、音・音楽・言葉について調べようと思ったか。人は様々な方法で音楽を利用し、今日まで生きてきた。例えば歌の歌詞によって励まされたり、生きる希望が持てたり、共感して泣いたり愛を伝えたり、愛を確かめ合ったりと、様々な力となって働くことがわかった。音楽無しでは生きていけないくらいだと言っても大げさではないといえるだろう。人間にとってそれは切っても切れない関係としてこれからも関わっていくはずである。

11040039 小瀧 弘美**「なぜ字幕は支持されるのか」**

日本人は外国映画を見るとき字幕で見るという人が多い。そこで本稿では、字幕が日本に入ってきた時期、字幕や吹き替えのルールを調べ、日本人はどの程度字幕を支持しているのかをアンケート調査した。その結果、昭和初期から字幕を取り入れた体制に馴染んでおり、翻訳の字数制限により作品の情報が削られてしまうにも関わらず、役者による演技、声をもっとも好む傾向があるために字幕が支持されている、という結果が得られた。

11040040 小溝美紗子**「女性ファッション誌のキャッチコピーにおける日本語表現」**

女性ファッション誌の表紙にあるキャッチコピーの日本語表現の特徴を明らかにするために、ファッションに関するキャッチコピーの表記の特徴と、規範的な日本語ではない表現について、ファッション誌6誌を6か月間比較調査した。その結果、6誌全てがカタカナの使用頻度が一番多く、読者層が高くなるとその割合が下がった。また、限られた文字数でイメージを喚起させるために日本語の規範と異なる表現になっていることが分かった。

11040041 今野 崇之**「三国志演義に見る諸葛亮孔明の人物像」**

「三国志演義」は、中国の魏、呉、蜀の国を中心に、さまざまな英雄たちが天下を争う時代を小説化し、物語にした物で、どちらかというと魏を悪とし、蜀の国を中心に書かれている。その蜀の国で天才軍師として活躍した諸葛亮孔明、彼の天才的な軍略を中心に、諸葛亮孔明という人物が、どのような人物だったのか、またその他の英雄達にとって、どのような存在だったのか考えてみた。

11040042 齊藤 香**「『国内外の日本語教育現場における教師の役割の差異』——日本語教育研修の経験をもとに——」**

筆者は台湾内の大学と国内の日本語教育機関において直接法の授業の見学・教壇実習の機会に恵まれ、またタイでは日本語の授業のアシスタントをさせていただく機会に出会った。教科書からは学ぶことのできない生の日本語教育現場を知り、漠然とではあるが授業の流れに大きな違いを感じ取ることができた。では、国内と海外における日本語教育の違い、日本語教師の役割の違いとは何なのか論じた。

11040043 齋藤 智美**「脱・ヴィジュアル系をするバンドの歌詞の変化」**

一般に脱・ヴィジュアル系とは、外見（メイク・衣装）だけでなくヴィジュアル系独特の音楽性の変化を伴うといわれる。本稿では、ヴィジュアル系バンドが脱・ヴィジュアル系をする中でどの

ような点が変化しているのか、実際に脱・ヴィジュアル系をしたバンドを調査し、具体的に言葉をいくつか挙げ、言葉の使用頻度、表記などの変化からヴィジュアル系バンドが脱・ヴィジュアル系をする中での歌詞の変化、歌詞の違いを示した。

11040044 齊藤 竜一

「巨大産業パチンコ業界の謎を追う」

今回のレポートではパチンコ業界の歴史や現状を調べ、この業界がどうしてこんなにも巨大な産業にまで成長していったのかを考えてみた。私は卒業後、この業界に就職するため、まだまだ不透明な部分が多いことに不安を覚えていた。そして、その不安を解消するために自ら業界のことを調べることにしたのである。これからパチンコ業界で働く者として今回のレポートはとても有意義なものになったと思う。

11040045 坂上紗由美

「『学習スタイル』の拡張の試み」

学習ストラテジーを取り入れることで意図的に学習スタイルの幅を広げることを「スタイルの拡張」(Oxford 2002)といい、学習を促進することがわかっている。本稿では、中国人学習者を対象に学習ストラテジーを教えることでスタイルの拡張を目指す授業を試みた。その結果、学習者に明示的に学習ストラテジーを教え、意識させて使う授業がスタイルの拡張に効果がある可能性があることを示唆した。

11040046 坂本 裕次

「カタカナ語の歴史」

カタカナ語は現在、日本では欠かすことのできないものとなっている。しかし、何年も前に外国から入ってきた外来語はどのようにして取り入れられ、それを擬した和製英語までもが誕生し、日本語として定着していったのか。カタカナ語の歴史と日本の歴史とを重ねることによって、カタカナ語の誕生の流れを知ることができるのではないかと考え、グラフや表を中心に時代・年代によるカタカナ語の変化を調べた。

11040047 櫻田 千晃

「歌詞による日本語教育の可能性」

現在私たちは、音楽を日常的に聴くことができる。しかし、その音楽(曲)の歌詞に注目することはなかなかないと思う。しかし、この歌詞には一般的な文章になっているものや、日本語の微妙な表現方法が数多くある。この日常的に聴くことができる音楽を使って、日本語学習者、さらに日本語母語者に教育として使うことができるのではないか。できるとしたら、どこまで可能であるのかを「記憶」を中心に研究してみた。

11040048 佐々木孝紀

「若者言葉 — 若者言葉は日本語の汚点か —」

本稿では若者言葉はどのように生まれどのように消えていくのか、その種類とサイクルについて調べたものである。また、日本語の乱れとも言われている若者言葉を否定的に捕らえるのではなく1つの日本語の特徴として肯定的に捕らえ調べたものである。

11040049 ジェレリー薫

「辞書に異議あり — 第二言語学習者が求める有益な辞書と語釈提示順序改善の追及 —」

第二言語学習時に辞書は欠かせないツールの一つだ。しかし、辞書の利用が人とのコミュニケーションに支障をきたすときがある。その原因は、辞書の語釈提示順序と母語話者が連想する語釈順序の相違、辞書ユーザーの辞書利用法の良し悪しなどが関係しているのではないかと考える。本論では、辞書の語釈提示順序と母語話者が連想する語釈の順序に相違がないかを調査し、よりよい辞書の語釈提示順序について述べた。

11040054 鈴木香菜子

「項羅語 — 「KY」「JK」の形が生まれた日 —」

新語に「KY」という言葉がある。KYとは「空気を読めない」という言葉の略語である。ただ単に「空読」と縮約するのではなく、「空気読めない」という日本語を「Kuuki-Yomenai」とローマ字表記し、アルファベットで表記した言葉だ。音は「ケーワイ」と読み、それぞれのアルファベットの音を残した読み方をする。このような略語を「項羅語」と名付け、論文のテーマとし、項羅語がいつごろ増加したか調査する。

11040056 関口 沙織

「化粧品広告のキャッチコピー」

本稿では、広告が大学生の化粧品の購買行動に影響を及ぼしているかどうかを明らかにすることを目的に、ファンデーションを購入する際に何を決め手にするかを、女子大学生50名を対象に、アンケート調査を行った。その結果、TVコマーシャル、口コミ、イメージキャラクター、店頭での勧誘、製品の色という回答が多い。企業によって相違はあるものの、化粧品会社の広告はそれらの項目を含んでいることがわかった。

11040057 関野 有起

「茨城方言について — 土浦市における方言の現状 —」

メディアなどの普及や都心に進出するようになり、他県の人が理解できないような特有の単語や強い訛りを話すことは少なくなってきている。まして、現代にあたっては標準語化が進むなどの変化が著しい。一方、方言を残そうとする活動も増えているのが現状である。従って、都心にも近い

茨城県土浦市在住の人々に的を絞り、今なおどれくらいの方言が使われていてどのような言葉が残存し、少なくなっているのかを比較、分析する。

11040060 田口美奈子

「岐阜県における外国人児童生徒への教育現状と課題」

現在、日本の外国人登録者数は201万1,555人にもものぼる。平成3年に出入国管理及び難民認定法が改正されて以来、南米人を中心にその数は年々増加し続けている。それに伴い、外国人の児童生徒も増加し、彼らへの教育が問題となっている。本論文では、近年日系ブラジル人の児童生徒が増加傾向にある岐阜県に焦点を当て、外国人児童生徒への教育の課題と現状について調査し、今後の教育がどうあるべきかについて述べる。

11040062 竹中 沙知

「現代日本における漢字の役割とその変遷」

近年まれに見る日本語ブームが巻き起こり、その中で「漢字」も大きく取り上げられるようになってきた。戦前から続く国語国字問題や、戦後の国語改革により一度は制限され廃止へと向かっていった漢字が、人々にどのように認識されて「漢字大国日本」と称されるほどになったのか、その経緯を明らかにする。

11040063 田嶋 文絵

「日本と韓国が「近くて近い国」となるためには——日本語会話参考書から分析する両国の相違点——」

日本と韓国は今まで「近くて遠い国」と言われてきている。なぜなら、互いに自分の国のものさしで相手を測ってしまい認め合えないからである。そこで本稿では、韓国で市販されている日本語会話の参考書の中にある日本紹介文をもとに、日本と韓国がどれだけ違うのが、どのように違うのか、また何が同じなのかを考察、分析した。その結果、現在の両国に足りない点や必要な点を見つけ出し、今後の両国の関係改善へと繋がる道標を示した。

11040064 田中信一郎

「昔話と日本神話」

本稿は、日本に伝わる昔話や伝説、伝承の内容、発生を調査し、その時代背景を基に日本文化について考察したものである。人間や動物、神や妖怪といった多種に渡る登場人物によって成り立っている。その昔話にはどのような意味があり、どのような経緯で語られるようになったのか、また、日本神話と共通する物語に着目し、昔話と日本神話にはどのような接点があるのかを調べた。

11040065 田中 佑

「日本文学に使用されるコーヒー（珈琲）について」

一休みしたい時の友である「コーヒー」。私はこの言葉が日本の文学作品でいつの時代に使われ始め、どのように使用されているのかに興味があり、「コーヒー（珈琲）」という言葉の使われ方について研究する。文献はインターネット上の「青空文庫」から用例を挙げ「コーヒー」の使い方を調べる。そして、年代別に使用回数を集計し、多く使用された年代について、どのような表記が最も使用されるのかを調べ考察する。

11040069 帖佐 真大

「古典敬語と現代敬語の移り変わり」

日々移り変わっていく日本語で一番大きく変化したのが、鎖国が廃止され他の国々と交流をし、異文化交流が盛んになった明治時代以前と以後の日本語であると考えた。本当に江戸時代と明治時代を境に日本語が移り変わったのか。そのような点を学生時代に一番苦勞した敬語に重点を置き、いつの時代に古語敬語は使われなくなったのか、現代敬語が使われ始めたのかについて、作品を挙げて検証した。

11040071 戸倉 大輔

「時代背景文学重要論」

今までの世の中において、人間が会話をしない日は限りなく0に近いものがある。しかし、僕らの話す言葉は日々、変動をとげている。そのなかにおいて、何故変わっていくのだろうか？ と私は考えたのである。そのため、この研究をして、自分なりに変化をうまく捉えて調べていきたいと思った。さらにそこには時代背景と言語に相互性があるのかを中心に考えていきたいと思う。日本では、言語、流行どちらが大事かもあわせて考えたい。

11040072 豊島 卓弥

「若年層における方言の広まり」

今日、言語は徐々に変化している。その中でも若年層における言語変化はそのスピードはとても早い。その言語変化の中でも現在、各地域の「方言」を用いての言語変化も同様に進んでいる。その方言を使用しているのが若年層である。方言は過去に撲滅されようとしていた。それ言語が今、なぜ使用されているのか。そして、どのようにその方言を若年層が使用しているのか、どのように変化させているのか、というところに着目した。

11040073 中 健太郎

「中学生と高校生の若者ことばとその現状」

日々の生活の中で、中学生や高校生など若者と呼ばれる世代のことばを耳にするたび、違和感を

抱き、地元の学習塾に在籍する中高生に特に気になっている10の若者ことばについて使うかどうかをアンケートした。そこから数ある若者ことばでも、省略ことばや使用するシチュエーションが限定されていないことばなどが特に使用頻度が高く、広く浸透していること、男子よりも女子の方がことばの変化に敏感であることなどが判明した。

11040074 中澤 広貴

「インターネット上の言語の乱れからみる日本語」

『日本語は乱れている』とよく言われ、よく問題になる。しかし、それは日常生活だけでなく、インターネット上でも乱れているのではないか。そう考え、今回はインターネットに注目した。まず、インターネット上での言語の乱れについて調べる。そして、それを元に、インターネットと日本語との繋がりを考え、結論として、インターネットが広がったことにより日本語はどうなっていくのであろうか、ということについてまで考える。

11040076 成瀬 涼子

「言葉の意味変化——“あした”を例に——」

「あした」という言葉は今現在では「明日」、昔は「朝」という意味で使われていた。そこで本稿では「あした」という言葉の意味が「朝」→「翌朝」→「明日」の順に変化した時期を明らかにすることを目的に、中世から近世にかけての有名な古典作品を調査、分析した。その結果、「あした」という言葉の意味が「明日」という意味に変化したのは『黄表紙』や『洒落本』などが書かれた時期の前後ではないかということを示した。

11040078 野田 圭佑

「法隆寺をはじめとする飛鳥時代の仏教美術についての研究」

法隆寺は、日本を代表する寺院であり、そして仏教信仰を代表する寺院である。そして、謎が多く、解明されていない事実も多数存在する。飛鳥時代に仏教が伝来した事実を踏まえた上で、「飛鳥時代」と「仏教」の観点から法隆寺の研究を行うことが重要と考えた。当時の人々にとっての仏教の考え方や法隆寺の存在と役割、そして、影響について調べた。法隆寺が現在まであり続けることにも意味があると考え、研究を進めた。

11040081 深津 知宏

「求められている教師とは」

教育実習に行き気になったことが、先生によって生徒の反応が違うということだ。どの学校にも生徒から好かれている教師、そうではない教師がいる。そこで現在学校で求められている教師とはどういう教師なのか、そこで、映画やドラマ、そして教師論からどんな教師が求められている教師なのか、調べてみた。教師とは簡単にいうと明るく健康的で、子どもが好きで、学ぶのが好きで、

身近にいるような人間であるということがわかった。

11040082 府川 一光

「落語について」

現在、お笑いブームと言われている。その中で日本のお笑いの歴史が長い落語を選んだ。落語を選んだ理由はもう一つあり、テレビドラマ「タイガー&ドラゴン」との出会いがあったので選んだ。ドラマだけでは落語の細かい部分までは分からないので、最初は落語の構成や歴史を中心に調べて、落語の噺がなぜ面白いのかを探求した。また、現在は落語にも多くの種類があり、今回は英語落語を取り上げて、落語の進化について考えてみた。

11040083 藤田沙友香

「レゲエの国ジャマイカと、レゲエが確立するまでの長い道のり及びレゲエが担う役割」

ジャマイカと聞いて何を思い浮かべるだろうか。ブルーマウンテン・コーヒー、レゲエ音楽、また最近では、世界陸上においても一層国の知名度は増加したように思われる。私はジャマイカ＝レゲエ音楽と即座に結びつく一人である。研究では、日本との関わり等、現在のジャマイカ情勢を踏まえたうえで、レゲエ音楽が確立するまでに至る工程や、民族性との結びつき及びその重要性を歴史的観点からとらえる。

11040086 堀井 秀一

「日本語の源を探る」

私たちがいま使っている日本語。それを誰がどんな形で使いはじめ、普及していったのか。あたりまえに使っていることば（単語）にはもちろん根源があり、その根源からどう移り変わっていまのことばになっていったのか。また、同じ語でも使いかたが違ったものであれば当時はどういった意味で使われていたのか。などを、単語家族・漢字・方言・擬声語・若者ことば等のテーマごとに分けて明らかにしていく。

11040087 本間 勇介

「日本の外国人労働者の行方」

日本の少子高齢化が進んでいるというのは、ニュースでよくみる。本研究では、少子化が起こった場合どのようなことが起こるのかを外国人労働者に視点を当てた。本当に外国人労働者が必要なのか。外国人労働者を受け入れることによって起こるであろうメリット・デメリットを第三者の意見により解決できるのかを述べた。また、現状の日本語教育の問題点を活かして、将来どのように日本語教育を行うべきかを述べた。

11040088 高橋 裕美

「接客 お客様にとって、よりよい接客とはなにか」

少し前までは正しい日本語ではないなどと騒がれたりもした接客用語。慣れからかそのような批評は耳にしなくなった。接客で使われている動作や言葉は、世代によって感じ方は様々だ。自分がよくても聞いている人はよく思っていないかもしれない。お客様にとって、どれが一番いい方法なのかを考えた。

11040089 松田 直人

「韓国語母語話者の日本語学習目的・日本語学習からみる日本・日本人に対する捉え方」

韓国語母語話者の学習目的は道具的動機が多く、先行研究と同一であった。しかし、統合的動機を見逃すことはできない。それは日本語との出会いにおいて統合的動機が多く、それから道具的動機に発展したからではないのか。統合的動機がどのようにして道具的動機に影響していったのか。そして本調査において学習目的・日本語学習の2方面から日本・日本人に対する捉え方を分析していこうと思う。

11040092 村上 允彦

「ドイツ語、日本語の発音の相違と標準語、方言の両国の位置づけ」

現在、急速にグローバル化が進む世界の現状。その中で、自分の体験も踏まえ、ドイツ語、日本語の2つの言語に焦点を当て、発音、標準語、方言などを研究することにした。

ドイツ語、日本語にはそれぞれ独自の言語体系が存在する。両言語の発音の比較をはじめ、標準語、方言の各国の歴史や、意識の持ち方、現在使用されている地域など、それぞれに視点を置きつつ、両国の比較もおこなった。

11040093 村山 淳一

「私と日本語教育」

高校一年のときに一ヶ月イギリスに英語研修へ行ったことで、初めて海外へ目を向けることになる。それまでは、考えもつかなかった、外国での生活に戸惑いながらも、自分の中で何か芽生え始めていた。日本語教育という学問に興味を持ち、大学に入ってから、韓国で二週間の実習、国内で二週間の実習を経験し、日本語教師という職業を最前線で、目の当たりにする。その経験から、感じたこと、気づいたことを書き綴ってある。

11040094 森田 明香

「自国の文化・コミュニケーションを理解することの重要性 ― 遠慮と察しの文化 ―」

異文化コミュニケーションにおいてもっとも大切なことは、まず自国の文化をよく理解することである。その次に相手の文化を理解しようという姿勢が大事となる。そうすることで相手の文化と

の相違点・類似点・差異が見えてくる。では私たち日本人はどのような特徴をもち、どのようなコミュニケーション方法を培ってきたのであろうか。私たちの代表的な文化である遠慮と察しの文化を研究しアンケートをとり考察した。

11040095 森田由香里

「国語辞典にみる「愛」と「恋」の意味記述の比較と変遷」

辞書にみる「愛」と「恋」の意味記述は出版社や辞書によって様々である。今まで発行された辞書で「愛」と「恋」についてどのように定義をしてきたか、また年代順に並べてみてどのような変遷を経て現代の定義に至ったのか。他にも用例・慣用句などを対象に、「愛」と「恋」を比較し考察していく。また国語辞典が社会の出来事に応じて、意味記述が変化しているという証明を少しでも出来ればと思っている。

11040096 門馬 祐介

「国際化時代における日本語教育の現状と課題」

国際化が叫ばれる現在、世界は国境を越えた地球社会へと変容しつつある。本稿では日本語教育に視点を置き、海外と国内で行われている日本語教育を調べ、何が必要か、何が問題なのかを考える。そして日本語を通して、世界の人々に日本を理解してもらうにはどうすればいいのか。その現状と課題を探っていくこととする。

11040097 矢部 愛恵

「日本語教育における格助詞の役割」

言語を習得する上で、文法を学ぶことは必要不可欠である。日本語教育においても、最近になって、文法教育の重要性が再び指摘されるようになった。しかし、文法こそが、学習者が一番難しいと感じてしまう部分であり、誤用も多く見られる。この論文では、その誤用の中でも特に「格助詞」をとりあげた。未だ、曖昧な格助詞の定義を、先行研究や日本語学習者の誤用から考え、明らかにしたい。

11040098 山岡 克也

「オタク文化について」

オタク文化は、映画「電車男」によりブームとなって以来、僅か数年で異常成長を果たしたものである。「メイド喫茶」や「コスプレ」のような代表的なオタク文化の紹介、オタク文化が経済市場に及ぼす影響、世界最大の同人誌展示即売イベント「コミックマーケット」などを紹介することにより、日本国内において意外なほど認知されていない「オタク文化」とはどういうものなのかということについて考察する。

11040099 山崎 美穂

「フィンランドの教育を通してみる日本の教育」

経済協力開発機構（OECD）による国際学力調査 PISA で好成績を納めたフィンランドと学力低下だと騒がれ問題視された日本。まず、PISA の調査概要を調べ、この調査で求められた学力、結果から見えてくる日本の教育現状について考えた。

次にフィンランドの教育制度、方法について調べ、二国にどのような違いがあるのか比較検討した。最後にこれらをふまえて、これから日本が取り組むべき教育課題について考えた。

11040100 山田 里恵

「小・中学校での日本語教室における授業の様子・支援 —— 外国人生徒への日本語・教科指導のとりだし授業 ——」

ニューカマーの増加に伴い、いわゆる外国人生徒が増えている。文部科学省や都道府県、市町村が外国人生徒に対して支援や日本語教育のとりだし授業を行ったりする学校が出てきた。本論文では9箇所役所、6箇所公立学校、2箇所のボランティア団体に出向き、調査・インタビューを行った。ニューカマーの記事を書いた新聞記者にインタビューを行うなどして、先行研究を参考に今後の学校教育における在り方について記した。

11040102 山本 雄士

「常に進化するコミュニケーションに対応するために」

今、コミュニケーションは激しく変化している。コミュニケーションの場がウェブ上に移動したこともあり、身体的コミュニケーション能力は徐々に低下している。これにより起こる様々な事件に対応すべく、コミュニケーションに必要な基礎知識から、コミュニケーション下手を脱するための基礎技術をまとめた。

11040101 山野 栄子

「記憶と日本語教育 —— 記憶のメカニズムから観る日本語語彙習得 ——」

日本語教育で、主に教室活動における語彙教育を、記憶の観点から概観した。学習者の脳の働きに合わせた有効な指導が、教師に求められる。いかに効率よく、新出語彙を学習者に記憶させるか、語呂合わせのような以前からある記憶法も有効であるが、認知過程に合わせた語彙の導入法や、繰り返しのタイミング、明示の方法など、現時点での脳科学での研究成果と照らし合わせて、まとめることができた。

11040104 湯浅 郁美

「J-POP の歌詞における外来語の意味のズレについて」

現在、人々が普段使用している日本語の中には数多くの外来語が存在し、私達はそれらをごく自

然に使いこなしている。しかし、外来語を使用する上で「普段使用している意味」と「原義」にズレが生じているものも多い。今回は身近なものとしてJ-POPに焦点を当て、「ポルノグラフィティ」の歌詞の中から歌詞中で使用されている意味と原義の意味のズレ、また変化・簡略化した語句が存在するかなどを調査する。

11040106 吉田 聖

「日本のロックはロックと呼べるのか？」

ロックという音楽ジャンルは、現在我々の身近に存在している。しかし世の中には「ロックは死んだ」や「日本のロックはロックではない」という否定的な言葉も存在している。この矛盾を解決するために海外のロックの歴史、日本のロックの歴史をそれぞれ見ていった。その結果、ロックという言葉の意味が時代によって、いくつも存在することがこの矛盾の原因であると判明した。ロックとは時代に合わせて変化していく音楽である。

11040109 林 建利

「ビジネスマナー実用書に見る外来語の意味変化の範囲」

実用書には「カタカナ語」が多いが、その意味を辞典で調べると必ずしも文意にそぐわないことがよくある。本稿ではそのような「カタカナ語」を最近のビジネス書から選び、母語話者を対象にその意味を自由記述してもらうことで、現代の母語話者の考える意味と辞典に載っている意味のズレを調査した。その結果、辞典の意味よりも拡張しているもの、より一般的な語で代用されているもの、などがあることに明らかになった。

11040909 和田美千代

「国際化に伴う日本語の変化について ― 外来語の現状 ―」

本稿は、日本の国際化に伴う日本語の変化の中で、特に「外来語」の現状について、国立国語研究所が実施したさまざまな世論調査の結果や資料を基に、現代日本人の「外来語」に関する意識や使用状況を調査・把握し考察するものである。近年著しく増加している外来語についての『外来語に関する意識調査』の結果を、性別・性・年齢別・職業別と分類した上で、その数値を相対的な見方で検分を行った。